

〔第二部〕

「戦争終結に導くのに倫理的で人道的な選択肢が他にあったことは
当時でも明白だったのにもかかわらず、原子爆弾が使用されてしまいました。
その悲劇に対して許しを請うのが、私の一生のテーマなのです。」

“The use of such a weapon is a new crime against human
culture.”

上智大学名誉教授 (Rev. Fr. Robert M. Deiters, SJ)

ロバート・ディーターズ師

ザビエル大学から海兵隊に、海軍日本語学校へ、
そしてイエズス会宣教師として敗戦国日本へ

イエズス会会員 カトリック司祭 米国オハイオ州出身
1924年11月生 (インタビュー時94歳)

第I章~第III章は〔第一部〕参照

IV章 イエズス会入会

海兵隊入隊後2年余で除隊を希望したが、正式な除隊には許可が必要だった。カトリック大司教が全米軍の Military Ordinariate という任務に当たっており、それは全米軍対象の「チャブレンの長」というものだった。特別許可を得るためにその Military Ordinariate に許可申請を出した。その間、再びザビエル大学の集中講義で社会学を勉強したり、友人とダンスやソフトボールに興じたりした。年末に「司祭職を嚮望しているという理由で

除隊を許可する」との知らせが届いたが、それは翌年 1946 年に枢機卿になったスペルマン大司教（Francis Spellman, 1889-1967）からの通達だった。1946 年 2 月にイエズス会シカゴ管区で修練期に入った。ディーターズ家は両親ともドイツ系の熱心なカトリック信者で、子供は男、女、男、女の 4 人だった。父親が経営していた印刷会社は、後に弟が引き継いだ。長兄に倣って妹二人も米国で創立された修道会のシスターになり、それぞれ校長、理事、教授などの要職を務め上げた。一番心を打ち明けてきたのは、すぐ下の 1 歳 3 か月違いの妹だったかも知れない。その妹も 1948 年に修道院に入った。

戦争は日本を物質的にも精神的にも徹底的に破壊し、国土を焼き尽くすだけでなく、戦前・戦中のイデオロギーからの急激な転換は人心を疲弊させてしまった。この惨状を鑑み、イエズス会総長は日本の精神的再建のために志願者を募り、宣教師として送り出す計画を立てた。占領軍最高司令官マッカーサー元帥も、キリスト教宣教師が日本に入国しやすい状況を用意した。ヤンセンス第 27 代イエズス会総長（Jean-Baptiste Janssens）選出直前の 1946 年、総長代理ドゥ・ボイン神父（N. de Boynes）は各管区長に手紙を送り、日本への会員派遣を要請している。新総長は 1948 年に日本を新たに準管区とすると発表し、翌年「全管区長宛ての手紙で、宣教師を日本に送るよう呼び掛けた。私は、ほとんど全イエズス会からできるだけ多くの会員を日本に送るように努めた」との記録を 1951 年に残している。**(写真 3、1946 年夏撮影。オハイオ州ミルフォードのイエズス会修練院で。スータンで腰にロザリオの修練者)**



戦後の状況は、日本への派遣を志望する個人が各管区に願い出るといふ恒例の手順ではなく、ローマの総長に直接希望を表明するという例外的措置を可能にした。この措置は、多数の若い宣教師が日本行きを目指すという結果をもたらした。ちなみに日本は 1954 年に独立管区に昇格した。戦前の上智大学には北ドイツ管区出身の会員と日本人会員の教員が多かった。だがこの方針転換によって戦後教授陣が多国籍化し、国連代表ほどの国籍数のイエズス会員が教えていたことを古い卒業生はよく覚えている。イエズス会のある記録によると、1947 年から 1999 年の半世紀余りの間、ほぼ 30 か国からの会員約 200 名が日本での宣教、高等教育、そして社会正義の分野で活躍したとある。

第 V 章 敗戦国日本へ

インタビューの翌月、2008 年発行の故郷シンシナティの大司教区報 *The Catholic Telegraph* に掲載されたインタビュー記事が送られてきた。それには “In 1952 Fr. Deiters volunteered, and was sent to Japan, where he eventually became part of the Japanese Province.”（ディーターズ神父は 1952 年に日本派遣を志願して手を挙げ、日本に送られ、後にイエズス会日本管区の一員になった）とあった。日本で将来働くことを望み、祈り、自らローマに願い出たのだろうか？ 希望して来日したのかが知りたくなった。確かめると、「そうではない。私から日本派遣を願い出たのではない」との意外な答えが返ってきた。ディーターズ師は「何であれ、神のみ旨を果たすことをのみ祈った」そうである。

それからしばらくして、1950年のあるエピソードが送られてきた。カトリック教会は8月15日に「聖母の被昇天」を盛大に祝う。その祝いの席で、「アベマリア」を様々な言語で壇上から唱えることになった。英語で 'Hail Mary'、文語体の「天使祝詞」では「めでたし、聖寵充満てるマリア」で始まる祈りである。日本語を担当することになったが、当然海軍日本語学校では教材として祈りを習うことはなかった。それである日系米人に手紙を書いて、日本語の「アベマリア」を教えてもらった。当時300名ほどいた修道者たちは、世界中の宣教地から一時帰国していたイエズス会員の唱える12もの言語で、聖母への祈りと唱和することができた。ちなみにその年の11月、教皇ピウス12世（1939-1958）は「聖母の被昇天の教義」を公布している。二十代前半には「日本語を話して人生を送るとは想像もしていなかった」と語ったが、その「アベマリア」が後に届いた日本行きの手紙だったのだろうか、と著者は想像する。

イエズス会会員には、入会から司祭叙階まで10年から12年ほどの勉学が標準である。ディータース師によると、「会員個人の意向は年に1度管区長と面談し、時間をかけて固めていくもの」だそうである。長上の決定がどのようなものになっても、心を開いて神の招きを待ちながら、与えられる使命に備えて哲学と神学の勉強を数年続けた。その間、もしシカゴ管区に派遣要請が届けばその招きを受けてもいいと思ったそうだが、「日本語の勉強はほんの数か月で、日本に対する知識も乏しいものでした」と、あくまでも謙虚な答えが返ってきた。そうするうちに、日本への派遣の報せが1951年度中に修道院に届いた。日本行きが最終的に確定した瞬間、どんな気持ちになったのだろうか。尋ねると、「日本の社会、出会うことになる各国出身のイエズス会の仲間など未知数が多くありました。でも、戦時中に数か月日本語学校で知り合った日系米人が好きになった経験があって、ワクワクして喜んでいました」との答えが日本語で戻ってきた。二十代半ばの若き修道者の、まだ見ぬ日本への期待と新鮮な喜びが感じられる言葉である。そのころ、チェルマック師（Nicolaus Čermák、当時のチェコスロバキア出身）に出会った。横浜の栄光学院で数年教えて宣教の経験がすでにあり、司祭叙階前の神学の勉強のために滞米中だった。週1度一緒に散歩しながら日本語で会話をし、俳句や日本文化について教えてもらった思い出がある。

日本への出発には、10歳年下の末妹ジョアの修道会入会が重なった。「長男ロバートと末娘までもが同時に家を去ることになって、ご両親はどう思われたのか」との問いに、「喜んでいた」と答えた。1952年4月に連合国軍の日本占領が終了した。同年9月、日本に鉄鉱石を輸送する大型運搬船でサンフランシスコを出港した。SS Marine Runnerは大圏航路をとり北米大陸西岸を北上してアリューシャン沖を航行し、千島沖から日本列島東岸を南下した。当時最短の11日間の航行で同月20日に日本に到着した。日系米人ではない日本人に横浜港で初めて出会ったことになる。当時田浦（横須賀）にあったイエズス会日本語学校で、今度は宣教に必要な日本語を1年間勉強した。海軍日本語学校で身に付けた基礎は役立ったかとの愚問に、「もちろん」と答えた。



（写真4、1996年ごろ。家庭を持った弟ポール（2016年帰天）のシンシナティの家で。姉妹で同じ修道会——Sisters of Charity of Cincinnati——に入ったSr. ジュリア・メアリー（2020年1月帰天）、Sr. ジョアンと4人で）

第 VI 章 日本でのミッション

翌 1953 年に上智大学で教え始めた。司祭叙階は 5 年後の 1958 年 3 月 18 日、麴町聖イグナチオ教会で土井辰雄東京大司教によるものだった（1892-1970、1960 年に日本人初の枢機卿）。五か国からの同志たちは、日本人 4 名、スペイン 3 管区の 7 名、米国 3 管区の 3 名、ハンガリー人 1 名、そしてブラジル人 1 名の計 16 名だった。ディーターズ師以外で上智大学の教壇に立ったのは、河野純徳先生（法学部）、土屋吉正先生（神学部）、柳瀬睦男先生（理工学部）、マヌエル・ディエス先生（外国語学部）、フランシス・マシー先生（文学部）、ゾルタン・ビハリ先生（後の比較文化学部）たちで、ルイス・カンガス師は麴町聖イグナチオ教会の主任司祭を長年務めた。この慶事には、はるばる故郷オハイオから母親と父方のおばが参列してくれた。

『アメリカ』誌に 2015 年に寄稿したブログ ‘Was bombing Japan the only option?’（原爆投下は唯一の選択肢だったのか？）を書いた経緯について、インタビュー後再度読む機会があった。太平洋戦争とその終結に至った背景についてのディーターズ師のイエズス会入会前からの考えが示されている。

「なぜ対日戦争が始まり、そして特にどのような状況で終わったのかを、過去 70 年間可能な限り理解しようとしてきました。アメリカ合衆国が高い道徳的規準を、いつ、なぜ維持できなくなり、その結果ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下で一般市民の無差別大量殺戮に手を染めることになったのかについても知ろうとしてきたのです。」¹

また 2020 年春、次の説明が送られてきた。

「ハーグ陸戦条約が禁止していたのにも拘わらず、米軍も他国軍同様第二次世界大戦開始のほぼ直後からその一線を越え、敵国民間人への大規模爆弾投下を実施しました。言い換えれば、原爆投下よりかなり前に米軍は道徳規範から逸脱していたとはいえないでしょうか？しかしハーグ条約には道徳原則がもう一つあり、それには「軍事的目的の達成であっても、過度の武力行使や、例えば毒ガスのように著しい苦痛と長期にわたる損傷を負わせるような武器使用は許可されるものではない」とあります。原子爆弾の使用は「長期にわたる損傷を負わせる」「過度の武力行使」そのものであり、日本を降伏させる目的であってもその使用は決して許されるものではなかった——この点からも、原爆投下は米国政府にとって道徳的破綻だったといえるでしょう。」²

ブログ記事 ‘Was bombing Japan the only option?’（原爆投下は唯一の選択肢だったのか？）では、広島と長崎への原爆投下（8 月 6 日、9 日）から 15 日の降伏までの期間（正確な日付は不明）に、当時の外務大臣兼大東亜大臣だった東郷茂徳（第 71 代外務大臣、1945 年 4 月 9 日-同年 8 月 17 日、鈴木貫太郎内閣）がスイス政府を通して発表した抗議の手紙を、掲載したジャパンタイムズ紙から丁寧に引用している。それは日本政府が発表した原爆投下に対する最初で最後の強硬な抗議文だった。³

どのような信念のもとに日本で働いてきたかについても、インタビュー後にメールで送られてきた（2019 年 3 月 28 日付メールより）。

…戦争終結に導くのに倫理的で人道的な選択肢が他にあったことは当時でも明白だったのにもかかわらず、原子爆弾が使用されてしまいました。その悲劇に対して許しを請うのが、私の一生のテーマなのです。⁴

この文を読んだ瞬間、著者の胸に熱いものがこみ上げてきた。上智大学で私たちはこんな先生に教えられたのである。

第 VII 章 上智大学の他の日本語学校体験者について

ディーターズ師によると、故マシー師（Francis Mathy, 1925-2015）は陸軍日本語学校終了後、1946年初旬に進駐軍（SCAP, Supreme Commander for the Allied Powers、連合軍最高司令部）陸軍少尉として終戦直後の東京に派遣されたそうである。首都東京の荒廃の中に立ち尽くし、「いずれここに宣教師として戻ってくることを決心した」と生前著者に語っている。マシー師は 1947 年 7 月にイエズス会に入会して 1953 年に再来日、ディーターズ師と一緒に上智大学で教え始めたのはその秋だった。二人の日本語学習体験は違っており、「日本語学校の全課程を終わっていたから、私は田浦の日本語学校で勉強する必要はなかったんだよ」と冗談めかしてよく話していたと他のイエズス会員から聞いている。マシー師は 2005 年の 80 歳の誕生日に 'Memoirs of An Octogenarian'（「八十歳の追想録」）を著している。マシー師の日本語学校での学習、言語官としての体験、そして日本宣教を志望した経緯も、誰か教え子に記録として残してほしいものである。この同い年の二人は 60 余年にわたり一番近い友人だった。

参考図書：

『太平洋戦争日本語諜報戦、言語官の活躍と試練』、武田珂代子著、ちくま新書 1347、2018 年 8 月

以下の情報提供者（2020 年 9 月当時）に謝意を表したい。

上智大学名誉教授、David Wessels 師
 上智大学名誉教授、Michael Milward 師
 上智大学学事局グローバル教育推進室、葛西利衣子氏
 上智大学財務局管財グループ、谷川寿彦氏

ロバート・ディーターズ師（Rev. Fr. Robert M. Deiters, SJ）

学歴

1952 年	米国イリノイ州 Loyola University of Chicago、文学学士号（ラテン語文学、当時司祭養成の標準条件）
1959 年	上智大学大学院修了、神学修士号
1963 年	米国ウィスコンシン州 Marquette University 大学大学院修了、電気工学修士号
1967 年	東京大学工学研究科電子工学博士課程修了
1968 年	東京大学工学博士号

職歴

1943～45年 米海兵隊、退役時海兵隊少尉 (US Marine Corps, Second Lieutenant)
 1946年～ イエズ会会員
 1958年 カトリック教会司祭叙階 (麹町聖イグナチオ教会にて)
 1968年～ 上智大学理工学部助教授
 1971年～ 上智大学理工学部教授
 1990年～ 上智大学理工学部特別待遇教授
 1995年～ 上智大学名誉教授

その他の職歴

1981～82年 客員研究員 University of California, Los Angeles (U.C.L.A.)
 1968～75年 共同研究員、宇宙科学研究所 (当時東京大学)
 1996～2003年 理工学振興会会長

学内の役職

電子計算機室初代室長、電気・電子工学科長、理工学部長

学会及び関係活動

所属学会：国際電気・電子通信学会 (IEEE) 、Senior Member
 1989～95年 日本シミュレーション学会理事

¹ "Over the past 70 years I have tried to learn as much as I could about how the war with Japan had begun and especially how it ended—when and why the United States lost the moral high ground by engaging in indiscriminate mass bombing of civilians, culminating in the dropping of atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki."
<https://www.americamagazine.org/issue/bombing-japan-was-it-only-option>

² "Actually, the U.S.A.—and all the military on both sides—had gone over to mass bombing of civilian populations not long after WW II began, even though the Hague Conventions forbade it. In other words, the US had already left the "moral high ground" long before the A-Bombs. However, there is another moral principle that says "to achieve a military objective, excessive force nor weapons like poison gas that cause painful and long-lasting injuries must never be used. Using A-Bombs was the use of excessive force that caused lifelong injuries to attain the objective, namely, the surrender of Japan. This also was a moral failure."

³ "It is the fundamental principle of international law in wartime that belligerents do not possess unlimited rights regarding the choice of the means of harming the enemy, and ... must not employ arms, projectiles or material calculated to cause unnecessary suffering (Hague Conventions). The indiscriminateness and cruelty of the bomb the U.S.

used this time far exceed those of poisonous gases and similar weapons, the use of which is prohibited because of these very qualities... The use of such a weapon is a new crime against human culture.”

⁴ “...a lifelong theme and my way of begging forgiveness for using the A-bomb when there were other ethically and humanely better ways to try to bring the war to an end.”

インタビュー、訳責共に上智大学言語教育研究センター所属、篠田愛理